

1 国語科（書写）の改訂のポイント

(1) 国語科（書写）の構成の改善

○ 「我が国の言語文化に関する事項」の中に「書写」として整理

我が国の言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、またそれらを実際の生活で使用するによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。

今回の改訂では、「書写」に関する内容を、「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」、「読書」とともに「我が国の言語文化に関する事項」の中に位置付けている。

(2) 国語科（書写）の目標及び系統性の重視

各教科等の学習活動や日常生活に生かすことのできる書写の能力を育成することを目標に、まずは、文字を書く基礎となる「姿勢」、「筆記具の持ち方」、「点画や一文字の書き方」、「筆順」などの事項から、「文字の集まりの書き方」に関する事項へと、内容を系統的に指導するよう示している。

さらに、文字や文字の集まりの書き方を基礎として、筆記具を選択し効果的に使用するなど、目的や状況に応じて書き方を判断して書くことについて示している。

2 国語科（書写）の目標及び内容

- 我が国の言語文化に関する事項のうち、書写に関して次の事項を理解し、使うことができるよう指導する。

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
(ア) 姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書くこと。 (イ) 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。 (ウ) 点画相互の接し方や交わり方、長短や方向などに注意して、文字を正しく書くこと。	(ア) 文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと。 (イ) 漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。 (ウ) 毛筆を使用して点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと。	(ア) 用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。 (イ) 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。 (ウ) 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

3 指導上の留意点

(1) 第1学年及び第2学年

- 姿勢は、背筋を伸ばした状態で体を安定させ、書く位置と目の距離を適度に取り、筆先が見えるようにする。
- 筆記具は主に鉛筆やフェルトペンを使用する。
- 筆記具の持ち方は、人差し指と親指、中指の位置、手首の状態や鉛筆の軸の角度などを適切にする。
- 点画の始筆、送筆、終筆を確実に書き、筆順に従い点画を積み重ねて、文字の形を形成していく過程を意識して書くこと。
- 正しく整った文字を実現するために、点画相互の関係性を理解すること。

(2) 第3学年及び第4学年

- 点画の組立て方だけでなく、部首や部分相互の組立て方を身に付ける。
- 文字を形づくる各部分が互いに等間隔、左右対称であることや、同一方向であることなどを考えて書く。
- 漢字と仮名や画数の違いにより、相互のつり合いを考え、文字の大小を整え、読みやすい文字列とする。
- 行の中心や行間、字間をそろえて書く。また、書き出しの位置や行の中心と文字の中心をそろえるなど、文字の集まりとしてとらえることが大切。
- 文字数の多い教材を毛筆を用いて指導する場合には、小筆の使用にも配慮する。
- 毛筆による学習を通して、点画や点画の書き方への理解を深める。その際、点画の書き方と筆圧とを関連づけて理解する。

(3) 第5学年及び第6学年

- 書く場面の状況によって書く速さが決まることを意識する。中学校での行書指導への橋渡しとする。
- 用紙の大きさから判断して、文字の大きさ、位置、字間、行間など効果的な在り方を考えて書く。
- 点画の中での穂先の動きだけでなく、点画から点画へ、文字から文字へと移っていく動きを意識して書く。
- 書き始めから終わりまでを無理なく書き進めるリズムを習得させる。
- 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書く。

4 国語科（書写）の「指導計画の作成と内容の取扱い」について

(1) 「指導計画の作成と内容の取扱い」について

- 文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮する。

- 硬筆を使用する書写の指導は各学年で行う。
- 毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行い、各学年年間30単位時間程度を配当する。
- 毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導する。
- **(新)** 第1学年及び第2学年の指導のうち、〔知識及び技能〕の「点画の書き方や文字の形に注意しながら」書くことの指導について、適切に運筆する能力の向上につながるよう工夫する。特に、水書用筆等※を使用した運筆指導を取り入れるなど、早い段階から硬筆書写の能力を高めるための関連的な指導を工夫することが望ましい。

※水書用筆等について

- 扱いが簡便で弾力性があり、時間の経過とともに筆跡が消える特性がある。
- 始筆、送筆、終筆（とめ、はね、はらい）までの一連の動作を繰り返し練習できる。
- 硬筆で適切に運筆する習慣の定着につながる。
- 第3学年から始まる「毛筆」を使用する書写の指導への移行を円滑にする。

(2) 内容の取扱いについての配慮事項

- 〔知識及び技能〕に示す事項の取扱いのうち、漢字の指導については、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること。

児童の書く文字を評価する場合には、様々に書かれた文字が、同じ文字として認識される一定の範囲内で許容されるべきものではあるが、正しい字体であることを前提とした上で、柔軟に評価することが望ましい。指導に当たっては、文字を円滑に運用できる能力を身に付けていくことができるよう配慮することが重要である。